



④ 予防接種



予防接種法に基づいて行われる、各ワクチンの定期接種についての情報をお知らせします。
また、予防できる病気や健康被害への救済制度についても合わせてお知らせします。



厚生労働省
ワクチンポータル

予防接種について

概要

予防接種には、自らが病気にかかりにくくなるだけでなく、社会全体でも流行を防ぐ効果があります。

ポリオ、ジフテリアなど、過去には、命に関わったり障害の原因となっていた重い感染症も、誰もが予防接種を受けることで、今では流行しなくなりました。しかし、予防接種を受けないと、海外に渡航したときなどに感染したり、再び日本で流行する原因となるおそれがあります。

予防接種とは

予防接種とは、病気に対する免疫をつけたり、免疫を強くするために、ワクチンを接種することをいいます。ワクチンを接種した方が病気にかかることを予防したり、人に感染させてしまうことで社会に病気がまん延してしまうのを防ぐことを主な目的としています。また、病気にかかったとしても、ワクチンを接種していた方は重い症状になることを防げる場合があります。

接種期間

赤ちゃんがお母さんから受け継いだ免疫が薄れてくる時期、病気にかかりやすい年齢や重症化しやすい年齢などに応じて適切な時期に合わせて接種をする必要があります。

予防接種法に基づく定期接種は、病気ごとに**定められた接種期間があります**ので、適切な期間内に忘れないように接種することが大切です。スケジュールの詳細はP35～P36を参照してください。



接種を控えた方が良い場合

以下の表にあてはまる場合は該当するワクチンの接種をお控えください。

種類	状況
すべてのワクチン	発熱(体温37.5℃以上)がある
	重い急性疾患にかかっている
	接種予定のワクチンでアナフィラキシーショックを起こしたことがある
	医師が不適当と判断した場合
ロタウイルス	腸重積症の既往歴がある。先天性消化管障害がある(その治療が完了した方を除く)。重症複合免疫不全症に罹患している。
BCG	予防接種・外傷などによりケロイドがある
B型肝炎	母子感染予防のため、出生後にB型肝炎ワクチン接種をした方
麻しん 風しん(MR)	妊娠の可能性がある

副反応について

予防接種の種類により、副反応(副作用)が起きることがありますが、多くは発熱や接種部分が腫れるといった比較的軽く、短時間で治るものです。ごくまれに、重いアレルギーなど、重症の副反応が起きることがあります。

日本では、ワクチンの安全性を確認するため、ワクチン接種後の症状について継続的な情報収集を行っています。また、収集した情報について、国の審議会で報告し、定期接種として接種する上で安全性に問題がないかを専門家が評価しています。

なお、万が一定期接種のワクチンにより健康被害が生じた場合に備え、**健康被害救済制度が設けられています**。救済制度については次のページをご参照ください。



健康被害救済制度



予防接種の副反応による健康被害は稀ですが、不可避免的に生ずるものなので、接種に係る過失の有無にかかわらず、予防接種と健康被害との因果関係が認定された方を迅速に救済する制度です。本制度は厚生労働省が認定し、町により給付が行われます。給付の種類や申請に必要な手続き等については以下の問い合わせ先までご相談ください。

問 健康推進係 ☎ 82-4170

任意の予防接種



任意接種ワクチンの接種医療機関の指定はありません。接種を希望される医療機関へ直接お問合せください。おたふくかぜワクチンについては、興部町国民健康保険病院にて無料で接種することが可能です(罹患歴がある方は接種不要です。)

インフルエンザワクチンについては、時期になり、十分な量のワクチンを確保することができたら、広報などで予約方法をお伝えします。

予防接種の受け方

接種医療機関



- 興部町国民健康保険病院



接種実施

毎週月曜日 小学生未満 13:30~15:30
(祝祭日は除く) 小学生以上 15:30~16:30

接種予約

接種を希望する前の週の月曜日までに下記問い合わせ先より電話にてご予約ください。

委任状について

予防接種法に基づく定期予防接種については、原則保護者の同伴が必要です。

やむを得ない理由で同伴できない場合は、予防接種を受けるお子様の健康状態を把握している保護者以外の方(祖父母や成人している兄弟など)が同伴し接種を受けることができます。この場合、**委任状の提出**が必要です。必要な方は健康推進係までご連絡ください。

【接種予約・予約変更】

問 興部町国民健康保険病院
☎ 82-2310 (平日 8:30~17:15)

予約時の注意点



接種間隔について

★生ワクチン(注射)を接種後、次に生ワクチン(注射)を接種する場合は4週間(27日)以上あける。

★同じ種類のワクチンを接種する場合は、定められた間隔をあける。

その他の接種については、翌日から接種することが可能です。

疾患罹患後のワクチン接種について

ワクチン接種による十分な免疫獲得と接種後の副反応を防ぐために、ウイルス性疾患(麻疹・風しん、水ぼうそう、おたふくかぜ、突発性湿疹等)に罹患した場合は、全身状態が十分に改善してから接種しましょう。

いずれも治癒後、2~4週間あけて接種することが望ましいとされています。

同時接種について

原則、4種類までどのワクチンとの組み合わせでも同時接種することができます。

ただし、**BCGは単独接種**となります。

予防接種の相談

接種内容や接種時期の相談、その他のお問合せにつきましては、子育て世代包括支援センターまでお問合せください。

※接種の予約や予約変更につきましては、左記の国民健康保険病院までご連絡ください。

問 子育て世代包括支援センター
☎ 82-4170 (平日 8:30~17:15)



予防接種



予防接種スケジュール表

予防接種	対象月齢	接種回数
ロタウイルス (1価)	経口生 6週0日後 ～24週0日	4週以上の間隔をあけて2回 ※1回目が15週0日を超えた場合接種できません。
小児肺炎球菌	2か月～5歳未満 ※接種開始月齢 2か月～7か月未満	初回接種 2か月～7か月未満に接種開始、4週以上をあけて3回 ※3回目は1歳未満までに終了 追加接種 初回接種後、60日以上おいた後、かつ1歳以降 (標準的には1歳3か月未満までの間に)に1回
B型肝炎	不活化ワクチン 1歳未満	初回接種 生後2か月から、4週以上の間隔をあけて2回 ※標準接種期間は2か月～9か月未満 追加接種 1回目から20週以上の間隔をあけて1回
五(二)種混合	2か月～7歳6か月未満 [二種混合] 11歳～13歳未満	初回接種 3～8週の間隔をあけて3回 ※標準接種は2か月から7か月未満 追加接種 初回接種後、6か月以上の間隔をあけて接種 ※標準接種期間は初回接種終了後12～18か月の間 二種混合 11歳から13歳未満で1回 ※標準接種は11歳から12歳未満
BCG	1歳未満	1回
麻しん風しん混合(MR)	[1期] 1歳～2歳未満 [2期] 就学前の1年間	1期 1回 2期 1回
水痘	1歳～3歳未満	3か月以上間隔をあけて2回 ※標準接種開始期間は12か月～15か月の間 ※標準的には6か月～12か月あける
日本脳炎	不活化ワクチン [1期] 6か月～7歳6か月未満 [2期] 9歳～13歳未満 ※特例措置あり	1期初回接種 6日以上あけて2回 ※標準接種期間は3歳～4歳未満 1期追加接種 初回接種終了後6か月以上あけて1回 ※標準的には概ね1年あける ※標準接種期間は4歳～5歳未満 2期 1回 ※標準接種期間は9歳～10歳未満
ヒトパピローマ(HPV) ※9価のみ	小学校6年生～高校1年生相当の女子 ※特例措置あり	3回：1か月以上の間隔をおいて2回接種、1回目の接種から5か月以上かつ2回目の接種から2か月半以上間隔をおき3回目接種。 ※標準的には1回目接種後2か月後に2回目、6か月後に3回目接種 ※1年以内に3回の接種を終了することが望ましい ※9価ワクチン1回目を15歳未満に接種した場合は、計2回接種も選択可能。
おたふく ※任意接種	注射生 1歳～	1回目 1歳時に1回接種 ※標準的には1歳～1歳3か月 2回目 小学校入学前の1年間に1回接種 ※ワクチン添付文書に記載ないが日本小児科学会推奨

予防接種





11歳から13歳未満
二種混合
☒

予
防
接
種

4回目
9歳～
13歳
未満

4 ☒

小学6年生から
開始
(女子)

☒ ☒ ☒

定期接種の推奨時期

定期接種が可能な期間

がいようばん
概要版

詳しく知りたい方向けの詳細版もあります。

小学校6年 ~ **高校1年^{相当}** の女の子と
保護者の方へ大切なお知らせ



HPVワクチンについて知ってください
～あなたと関係のある“がん”があります～

ウイルス感染でおこる子宮けいがん

詳細版
P2~3

「がんってたばこでなるんでしょ？」

「オトナになるものだから私は関係ない」って思っていないですか？

実はウイルスの感染がきっかけでおこる“がん”もあります。その1つが子宮けいがんです。

HPV(ヒトパピローマウイルス)の感染が原因と考えられています。

このウイルスは、女性の多くが“一生に一度は感染する”といわれるウイルスです※。

感染しても、ほとんどの人ではウイルスが自然に消えますが、
一部の人でがんになってしまうことがあります。

現在、感染した後にどのような人ががんになるのかわかっていないため、
感染を防ぐことががんにならないための手段です。

※HPVは一度でも性的接触の経験があればだれでも感染する可能性があります。



女性の多くがHPV(ヒトパピローマウイルス)に
“一生に一度は感染する”といわれる

がんになる場合も

感染を防ぐことが
がんにならないための手段

<何人くらいが子宮けいがんになるの？>

日本では毎年、約1.1万人の女性が子宮けいがんになり、毎年、約2,900人の女性が亡くなっています。
患者さんは20歳代から増え始めて、30歳代までにがんの治療で子宮を失ってしまう(妊娠できなくなってしまう)人も、1年間に約1,000人います。

<一生のうち子宮けいがんになる人>

1万人あたり132人

2クラスに1人くらい



1クラス約35人の女子クラスとして換算

<子宮けいがんて亡くなる人>

1万人あたり34人

10クラスに1人くらい



HPVワクチンの効果

詳細版
P4

HPVの中には子宮けいがんをおこしやすい種類(型)のものがあります。
HPVワクチンは、このうち一部の感染を防ぐことができます。
現在日本において受けられるワクチンは、防ぐことができるHPVの種類によって、
2価ワクチン(サーバリックス®)、4価ワクチン(ガーダシル®)、
9価ワクチン(シルガード®9)*の3種類あります。*2023年4月から、シルガード®9も公費で受けられるようになりました。
サーバリックス®およびガーダシル®は、子宮けいがんをおこしやすい種類である
HPV16型と18型の感染を防ぐことができます。そのことにより、子宮けいがんの原因の50~70%を防ぎます※1。
シルガード®9は、HPV16型と18型に加え、ほかの5種類※2のHPVの感染も防ぐため、子宮けいがんの原因の80~90%を防ぎます※3。
また、HPVワクチンで、がんになる手前の状態(前がん病変)が減るとともに、
がんそのものを予防する効果があることもわかってきています。

※1-3 HPV16型と18型が子宮けいがんの原因の50~70%を占め(※1)、HPV31型、33型、45型、52型、58型まで含めると、子宮けいがんの原因の80~90%を占めます(※3)。
※2 HPV31型、33型、45型、52型、58型

HPVワクチンのリスク

詳細版
P5

筋肉注射という方法で注射します。接種を受けた部分の痛みや腫れ、赤みなどの症状しょうじょうが起こることがあります。
ワクチンの接種を受けた後に、まれですが、重い症状※1が起こることがあります。
また、広い範囲の痛み、手足の動かしにくさ、不随意運動※2といった多様な症状が報告されています。
ワクチンが原因となったものかどうかわからないものをふくめて、
接種後に重篤な症状※3として報告があったのは、ワクチンを受けた1万人あたり約3~5人※4です。
接種するワクチンや年齢によって、合計2回または3回接種しますが、
接種した際に気になる症状が現れたら、それ以降の接種をやめることができます。
接種後に気になる症状が出たときは、まずはお医者さんや周りの大人に相談してください※5。

※1 重いアレルギー症状(呼吸困難やじんましんなど)や神経系の症状(手足の力が入りにくい、頭痛・嘔吐・意識の低下)
※2 動かそうと思っていないのに体の一部が勝手に動いてしまうこと
※3 重篤な症状には、入院相当以上の症状などがふくまれています。報告した医師や企業の判断によるため、必ずしも重篤でないものも重篤として報告されることがあります。
※4 サーバリックス®およびガーダシル®は約5人、シルガード®9は約3人
※5 HPVワクチン接種後に生じた症状の診療を行う協力医療機関をお住まいの都道府県ごとに設置しています。

子宮けいがんて苦しまないために、できることが2つあります

詳細版
P7

① 今からできること

日本では、小学校6年~高校1年相当の女の子を対象に、
子宮けいがんの原因となるHPVの感染を防ぐ
ワクチンの接種を提供しています。
HPVの感染を防ぐことで、
将来の子宮けいがんを予防できると
期待されています。
カナダ、イギリス、オーストラリアなどでは
女の子の8割以上がワクチンを受けています。



② 20歳まいになったらできること

HPVワクチンを
受けていても、
子宮けいがん検診は
必要です。
定期的に
検診を受けることが
大切です。



HPVワクチンについて知ってください

すべてのワクチンの接種には、効果とリスクとがあります。

まずは、子宮けいがん^{けい}とHPVワクチン、子宮けいがん検診^{けんしん}について知ってください。

周りの人とお話ししてみたり、かかりつけ医などに相談することもできます。



HPVワクチンを受けることを希望する場合は

詳細版
P4,8

小学校6年～高校1年相当の女の子は、HPVワクチンを公費で受けられます※。

病院や診療所^{しんりょうしよ}で相談し、どれか1種類を接種します。ワクチンの種類や接種する年齢によって、接種の回数や間隔が少し異なりますが、いずれのワクチンも、半年～1年の間に決められた回数、接種します。接種には、保護者の方の同意が必要です。

※公費の補助がない場合の接種費用は、サーバリックス^{さーばりくす}およびガーダシル^{がーだシル}では3回接種で4～5万円、シルガード^{シルがーど}9では3回接種で8～10万円、2回接種で5～7万円です。



3種類いずれも、1年以内に接種を終えることが望ましいとされています。

※1 1回目と2回目の接種は、少なくとも5か月以上あけます。5か月未満である場合、3回目の接種が必要になります。

※2-3 2回目と3回目の接種がそれぞれ1回目の2か月後と6か月後にできない場合、2回目は1回目から1か月以上(※2)、3回目は2回目から3か月以上(※3)あけます。

※4-5 2回目と3回目の接種がそれぞれ1回目の1か月後と6か月後にできない場合、2回目は1回目から1か月以上(※4)、3回目は1回目から5か月以上、2回目から2か月半以上(※5)あけます。

HPVワクチンについて、もっと詳しく知りたい方は

このご案内の内容をもっと詳しく説明している

「HPVワクチンについて知ってください<詳細版>」や、
その他のご案内をご覧ください。

厚労省 HPV



HPVワクチンに関するよくあるご質問(Q&A)については、こちらをご確認ください。

